

# Dhādekī-Sālhāpūr の農業 (1)

## —北インド農村の社会と文化 (V)—

佐々木 明

本稿では、(I)でDhādekī-Sālhāpūrの農業を概観し、(II)でkharif(夏作)、(III)でrabi(冬作)についてのべ、(IV)では近年の変化を排除して1975年当時復原しえた伝統的農業経営を記述する<sup>(1)</sup>。北インドの農作物の分類にはkharif, rabi以外にdōfassil(通年作)があるが、dōfassilの主作物甘蔗(ikh)の栽培拡大は近代的なのでここでは論じない<sup>(2)</sup>。北インドの農村社会の基礎構造を考察するのに必要な農耕・牧畜関係文化要素を記述するのが本稿の目的であり、数量的分析を目的としないことに言及する必要がある。

以下の各項でのべる農業経営を行う基本的単位は、乳幼児を除き<sup>(3)</sup>5～6人からなるJāt世帯で、保有面積は3～4ha、常傭のChamārを一人雇入する<sup>(4)</sup>。自らの家族を養う他に、雇入するChamārの世帯(約4人)のわずかな生計の主要部分に該当する現物賃金を払ってこの世帯を養う必要がある。農業経営の象徴でもある犁をひく去勢した雄牛2頭を必ずふくむ家畜群<sup>(5)</sup>と役畜のひく荷車を一台もつ。作付は通年的で、kharif(短日性作物)では主に雑穀・米を、rabi(長日性作物)では大麦・小麦・グラム豆を、やや稀に補助的灌漑を用いて栽培し、一部を自家用・賃金用とし、過半を市場に売却する。売却目的・売却品目には歴史的変動が大きいが、自家消費量と市場売却量の比率の変動は連続的であり、市場との関係が伝統的なこと(佐々木, 1983: p. 82)を既に述べた。

北インド農村の社会構造と関連し、農業に係わる最も重要な現象は、農村居住人口が、そのほとんどがJātである農業経営者と、その経営に長短期に随時雇入される労働者層とに、身分的に分化している点である。この身分分化を最も明瞭に観察できるのは、村内の雇用関係の主体をなす農業的雇用である。経営者支配 caste と雇用される非支配 caste 群との具体的関係を、作物・畜力・灌漑・農具等の技術的要素が規定する。常傭が多く(Gupta, L. C., 1966: p. 28)、通年的には雇用関係が安定的で低賃金の印象を与えるが、農繁期には村内労働力が不足し、生産性に比し労働力が割り高で、経営者は努力の少なからぬ部分をあらゆる機会を通じての労賃削減に注ぐ。制度化された削減の結果、労賃は農業経営と被雇用者身分の双方の再生産を可能にする狭い範囲の低い水準に維持される。労賃の水準は被雇用者身分に主食糧を確保させるよりわずかに高い程度で、主食費以外の費目にむけられる所得の地主自作農: 非地主自作農の比は10: 1以上であり、二つの身分群の生活の差が維持される。

支配 caste と非支配 caste 群の差が消失しない農業上の原因は、北インドの伝統的農業が3ha以下では成立しないことに求められる。本稿では経営規模の不連続性の原因を究明できない<sup>(6)</sup>が、現実的に非支配 caste の極小農民が少しづつ経営を拡大して本格的な地主自作農になる事態がおきない。2ha以下では経営者自身の村内被雇用収入なしには経営を維

持できない。つまり、極小農民がこの規模の経営を拡大しようとする、やや大きくなればなるほど、自己の経営外に労働力が流出し、それ以上の経営拡大が加速度的に困難になる。換言すれば零細保有では耕作が欠損を生ぜしめるので、小耕地を支配 caste 地主自作農に貸して、自らは賃金労働に従う (Etienne, 1968 : pp. 84~89) のがむしろ合理的である。逆に、3 ha以上の地主自作農経営が3 ha以下の規模に分裂する事例は男子の均等分割相続慣行により生じやすい。下限を著しく割り込む小規模相続者が村内に滞留して村内雇用に従うと身分的従属、下降を招くと考えるので、不在地主として村外の都市的雇用に逃避する。下限よりも多少小規模な経営では、経営維持は可能だが規模拡大の不可能な事態から脱却する慣行のを利用して、下限以上の規模拡大を実現する。

### (I)

Dhādekī では農地およびその周辺を *jangal* (st. H. 「森、林、荒地」)<sup>(8)</sup>、一つ一つの畑 (耕作・保有の単位、*筆*) を *khet* (H) とよぶ。北インドの伝統的農法では、収穫の不安定を補うために数種の作物を同じ畑にまく混植パターンが多数存在し (後述)、各 *khet* の微気候・土壌条件に最も有利なパターンを選んで作付した。兄弟間での財産分割は厳密な均等を指向するから、上記条件が同一である畑を兄弟数に小さく分割する傾向が強い<sup>(9)</sup>。ただしこの細分化が表面的であるのは、1960年代の交換分合後に一ヶ所に集中した農地 (*chakk*)<sup>(10)</sup> が前述の3 ha前後の水準を割っていないことから明らかであり、前述の身分的経営規模維持メカニズムが有効であることがわかる。

伝統的な肥料は緑肥と人糞だった<sup>(11)</sup>。燃料を含む豆科植物等の刈り残しを60cm程すきこんで緑肥とすることがある。貯蔵人糞の計画的施肥がないことを「ヒンドゥー教の清浄観」に帰すことがあるが、北インド農村でも人糞を肥料に用いる。つまり人間が地目上特別扱いされる畑 (*gōhan*) で排泄し非貯蔵人糞を非計画的に肥料とする。地目上の特別扱いは不潔さからではなく、*gōhan* では多毛作が可能で税金が多く課せられるからである。近世都市近郊に多かった園芸の農業も大面積の *gōhan* を利用した<sup>(12)</sup>。貯蔵人糞の計画的施肥がなかったのは農業の集約性がその水準に達しなかったからであり、人糞が肥料になることを意識し、制度化していたのだから、宗教的清浄観から不潔な肥料の利用を忌避していたとは認めがたい<sup>(13)</sup>。

播種用の穀物・豆類の種子<sup>(14)</sup>は原則として自給し、もし必要ならば支配 caste 間で融通する。収穫した農作物のうち甘蔗以外の部分のほとんどをしめる穀物 (小麦・米等) の大半は周辺小都市の自由市場で売却する<sup>(15)</sup>。

北インドの地主自作農一般と同様に、Dhādekī の Jāt にも農作業忌避傾向が全くないのではないが、雇入労働力のみで経営する例はない。農業労働者の雇用は現在でも雇用者が支配 caste に限定されている点で高度に身分的であるが、特定の経営者 (*zamindār*) が特定の Chamār 世帯 (*raiyā*) を経済外的関係を随判する世襲的常傭とする伝統的な身分的雇用関係は存在しない<sup>(16)</sup>。Chamār の世襲的常傭いと共存しうる<sup>(17)</sup> 現行の短期雇用では出来高払いが多い。

短期雇用の主体をなす収穫作業<sup>(18)</sup>の現物出来高払いは、米で75kg/10 a、小麦で5%である<sup>(19)</sup>。支払い量では米が小麦よりも被雇用者にとり有利な印象を与える。しかし、北イン

ドでは稲ワラを加工用とせず、他方麦ワラが飼料となるので、容積の大部分を占めるワラも考慮すれば、rabi の支払いの方が被雇用者となつては遙かに好ましい。

混植、つまり数種類の種子を一筆の耕地に混ぜて播くパターンが複数ある。混植は rabi に多く mattar (エンドウ豆 *pisum sativum*), channa (エジプト豆 *cicer arietinum*), masūr (レンティル豆 *ervum lens*) を麦類と混植する。Kharif でも urd (*phaseolus radicans*) を bajrā (*pennisetum typhoideum*) jowār (*sorghum vulgare*) と混植する<sup>(20)</sup>。混植により個々の作物の豊凶に係らず安定した総収量を確保できる。特に rabi では主穀小麦が冬期寡雨により発育を遅延し、乾期の気温急上昇により稔種障害をおこしやすいので、早生作物(大麦・豆類・菜種等)で補なう必要が大きい。伝統的無施肥農法では、休耕と収穫後放置した作物(特に豆類)の枯れた栄養体のすきこみが地力回復の主要手段だったから、村民は意識していないが、何割かの豆類を混植するのが重要な地力維持方法だった。

Dal につぐ副食の sabji の材料である野菜を村で生産するのに、購入する際には町の市場を通すことを既に述べた(佐々木, 1983: p. 80)。需要が多いのに Jāt が野菜をつくらないのは、野菜畑が前述の gōhan であり、不潔だからと Jāt は説明する。Dhādekī の約 1 ha の野菜畑<sup>(21)</sup>は Jāt が保有し、Jinwar が小作する<sup>(22)</sup>。土地を貸し出すのは、保有地に比し世帯規模が小さく、家族労働が不足するからである<sup>(23)</sup>。畑の所々には小枝製の ām (マンゴー) 幼樹の保護柵(ツト状の karbī)があり、幼樹が少し大きくなると小作期限が切れるから、野菜畑を果樹園(bāgh)にする<sup>(24)</sup>。実態は野菜畑だが、果樹を一応植えてあるので地目上は果樹園だから、保有者たる Jāt は品位を汚す野菜造りの忌避を形式上貫徹している。果樹では他に kēlā (バナナ) が全村に 60~70 本あり、果実を周辺小都市に売るが、村民の食卓にはのせない。

## (II)

稲の分類法は二つある。一つは、粒の裸出した dhān と粒が葉につつまれた munj とにわけける穂の形態による分類で、もう一つは、茎が長く雨期に水没しない 6 月播種の水稻型早生種 agaetī (ʔāgē) と 7 月播種の陸稻型晩生種 pachēli (ʔpacchē) の早生・晩生分類である。Dhādekī では早生種を広く作付せず、pachēli が主要品種群である<sup>(25)</sup>。水田様の耕地で作付するが、一度の降雨または灌漑<sup>(26)</sup>による滞水は 3~4 日程度で、常時冠水しないから、小麦の畑地灌漑(後述)と大差ない。雨期開始後、耕土がやわらかくなってから、主として Jāt 自身が二頭の去勢雄牛のひく犁で耕起する。適当な降雨があって滞水すると二頭の去勢雄牛にひかせた gahan (次稿参照)を用いて整地する<sup>(27)</sup>。耕地面を物理的に平にするのが整地の主目的ではなく、表土を攪乱しないと除草困難な根のはった雑草を除くのが目的であると感じられる。伝統的稲作は直播で田植えがなかった<sup>(28)</sup>。運河灌漑が可能になる以前には、溜池・自然滞水地等の季節的湿地・半湿地に小規模に作付するのが Dhādekī の稲作だった。稲を他作物と混植するのは稀だが、甘蔗の間に作付することがあり、小面積の半湿地に稲・甘蔗を混植した景観を想像させる。

収穫期の近づいた稲田は多少のひえをみる程度である。水がかりが不充分でむらがあるので、一筆のなかでも水源からの距離・土中湿度により収穫期が大きくずれる<sup>(29)</sup>。播種・田植えが同一日でも部分的に収穫していき、一筆全体を刈り取るのに半月を要するほどであ

る。稲の収穫・脱穀作業には村内外の農業労働者だけでなく、都市 Muslim 貧民も動員する。一筆を段階的に収穫する時でも別々の労働者を雇う。Dhān はかなり高く根刈りして小さな山につみ、munji は後述の小麦収穫に似て一列に並び下から刈り取り、労賃は前述のとおりの 7.5kg/a である。Dhān は脱粒性が高いので、刈り取る畑の片隅にひろげた布の上においた箱の角でたたきつけて脱穀し、収穫労働の延長として労働者に 25 a あたり 5.5kg を上積みして支払う。Munji は畑では脱粒しないので耕地から運び、屋根の上で乾燥させて<sup>(30)</sup>から、大部分はたたきつけて、一部分は麦と同様に、脱穀する。脱粒性の高い dhān は運ぶ途中で実が脱落するので盗難の恐れがないが、脱粒性の低い munji は刈り取ったまま放置すると盗まれることがあるので、刈り取った日のうちに abadi に運べなければ、畑に小屋をつくって監視する。穀のまま長期間保存し、料理する前に少しづつ精米することは既に述べた。

伝統的に広く作付したのは米よりはむしろ bajrā (トウジンビエ：学名既述) と jowār (モロコシ：学名既述) だった。双方とも現在では専ら飼料用で、20C 初め以前には食用率が現在より高かったとみられるが、伝統的農業で食用が主だったと断定する根拠はなく、土地利用・労働力投入からみて、前近代でもむしろ主として飼料用に粗放栽培<sup>(31)</sup>した可能性が大きい<sup>(32)</sup>。米作は運河建設以前には小規模で、bajrā・jowār が主として飼料用だったとすれば、kharif が食糧生産に占める割り合いを小さく評価すべきである。Bajrā, jowār とともに単独播種するより豆 (urd 等：学名既述) と混種することが多い。雨期開始直前に二人一組で、一人が骨折した手をつるすように左手にかけた布のなかの種と豆を右手ですくって歩きながら左右に播き、もう一人がそのあとを覆土し、一時間に 25 a の畑に播種する。Bajrā, jowār とともに混植した豆とともに成長し、必要に応じて約 6 a/h の速度で飼料用に青刈りする。つまり、kharif の全期間を通じて、bajrā・jowār を栽培するとは限らない。

食用に作付することが比較的多い米以外の kharif 穀物は makkī (トウモロコシ) である。現在の食用作付面積は大きくない。農村内外の各種労働者として雇用される中間 caste が、片手間に除草・灌漑を多く要さず、しかも食糧として好ましい makkī を作付する程度である<sup>(33)</sup>。Makkī の収量が bajrā・jowār の 2 倍弱の 180kg/10a に達するので、食用として小規模に作るには最適である。ひいた makkī 粉と āṭā をまぜた makkī rōṭi は貧民の主食とみなされている。

この他に若干の非穀物を作付する。前述のように urd は専ら飼料用に混植する重要作物だった。Gawar (sp. unknown) も bajrā と混植 (1 : 1) して飼料用とした。Lobia (ささげ：vigna sinensis) も jowar と混植 (3 : 1) して飼料・緑肥用とした<sup>(34)</sup>。Dhaichā (または sōkta, stH patsan : hibiscus cannabinus) を甘蔗畑の端にうえ、rabi 収穫前に刈り取る。長さ 4 m に達する dhaichā は飼料にも用いるが、燃料として貴重なので、周辺小都市の市場で一束 8~10Rs で売却する<sup>(35)</sup>。Tohar (sp. unknown) も多くはないが同様に作付される。重要な繊維作物である sām (または sāni : 麻) を bajrā・urd と混植し、一部を燃料用にした。かつては油料作物として til (ゴマ) と tōriyā (sp. unknown) を作付したが、現在では地力回復用に後者を小規模に栽培するだけである<sup>(36)</sup>。

## (III)

Rabi でも混植が多く、単植小麦畑はやや少なかった。主要なのは大麦・小麦を混ぜた gojāi (stH gojā? <Gujār) とこれに豆を加えた bejhār (? <bē(P)「無」+jhār (H) 雑草・茨) だった。播種前の11月に去勢した雄牛二頭のひく犁を用いて入念に耕起し (Etienne, 1968 : p. 72), 土中の酸素をふやして発芽を助ける。一筆の耕作を kharif・rabi とつづける場合には特に丹念に耕起する。Kharif の最後の収穫から rabi の播種の間は約一週間なので、晩生の kharif 穀物を大面積に作付すると rabi 播種まで甚だしく多忙になる。麦・豆とも kharif と同様にして 1.5kg/25a の量をまく<sup>(37)</sup>。伝統的な混植 rabi 畑には灌漑が不要で、冬期降雨の少ない年のみに一回程度の人力灌漑をするだけで充分だった。灌漑するときには、畑のなかに低い土手をつくって、kyāri ((H) 園地の区切り・枠) または dōr ((A)「廻り」) とよぶ 3-4 m の正方形単位に区切って、水源に一番近く比高が最も高い単位から始め、ある単位が溢水すると隣の単位との間の土手を崩しこの隣の単位に導水し、各単位を次々に溢水させ長時間かけて少量の灌漑水が全体に行き渡るようにした<sup>(38)</sup>。

kharif と異なり rabi では除草が不要<sup>(39)</sup>、伝統的農法では耕起・播種のあとほとんど放置したまま収穫をむかえた。Rabi 収穫労働には一日 5Rs 以上の賃金と収穫物の 5% の現物を支払う。Rabi 収穫が年間を通じて最も重要かつ特別な農作業であることをこの賃金から理解できる。1 日刈り取り量の 5% は 20-30 束 (pūli) に相当する。1 pūli は約 3 kg で、うち 1 kg が穀粒重、2 kg がワラ<sup>(40)</sup>だから、1 日の現物賃金は 20-30kg の穀物に相当し、ātā (各種 rabi 作物の混入した粗びきの小麦粉) に換算して約 15kg にあたる。つまり rabi 収穫労働を約 10 日間つづければ、1 年間の 1 人分の主食を確保できる。被差別農業労働者世帯 (Chamār) の家族構成員数は平均 4 人強だから、夫婦で rabi 収穫期に 3 週間休むことなく働けば一家族の年間主食糧を確保して多少余るほどの現物賃金を取得できる。現実には収穫期間が 2 週間程なので、全主食糧を rabi 収穫時の現物賃金で確保するのは困難だが、非現物賃金を加えれば収入面からみて rabi 収穫が労働者世帯の年間収入の大部分を支持しているのは明瞭である。収穫期には、Brahmin と Bhangī を除く<sup>(41)</sup>中間 caste も作業に雇入され、事実上全村民が参加する<sup>(42)</sup>。

原則として一日毎に労働者を調達した。何日もつづいて、または数年にわたって同じ労働者群をあつめることはない。この時期には労働力が不足し、低賃金ならば常傭いすら他の経営に流出するほどだから<sup>(43)</sup>、安定した顔触れを集めるのは極度に困難である<sup>(44)</sup>。人集めには前日の夕方に主として Chamār の居住区にいき<sup>(45)</sup>、収穫すべき畑の広狭にあわせて 1 ha あたり 20 人程度を顔見知りやその居住区の顔役を通じて調達する。人手は不足するが、乾燥と気温上昇が急速に進み穂先が折れて落ちやすいから、短期間に集中的に rabi 作物を収穫する必要がある<sup>(46)</sup>、人数を減らせない。収穫労働のチームは仲介者の親族と無関係ではないが、求人規模に比し Chamār の親族集団が小さく<sup>(47)</sup>、親族集団を二つ以上併せなければチームが組めないが、経営者が雇用しようとする人数と適当な複数集団の労働者人口総計が一致する保証はない。前日の夕方に畑の位置をおしえ、翌未明に現地集合する。一世帯分の成人被雇用者 (多くは二人) が一組になって、畑を带状に分担して、pūli をつぎつぎにつくる<sup>(48)</sup>。作業は昼休みをはさんで 4-7 時頃までつづく。月の明かるい晩には日没後

までつづけることがある<sup>(49)</sup>。

Abadī の周辺の空地である khalyān ((H) 脱穀場? <khul 「空の」<sup>(50)</sup>)に刈り取った作物を運び、束をはずして2日間乾燥させ、その上に牛<sup>(51)</sup>を歩かせて脱穀する。Khalyān では牛をひく他にもう一人がワラの山をかきまわしてむらなく脱穀させる。Khalyān が一杯ならば農地内に山にして干す<sup>(52)</sup>。Khalyān で粉碎したワラクズ (bhūs) をそのまま飼料に用いる。Lū (西南西の熱風) を利用して、1時間に約20kgの速度で脱穀した麦を khalyān で風選 (ukhā? <ukham(H) 「暑さ」, st. H urānā 「とばす」) する<sup>(53)</sup>。風選した穀粒をカゴ (tōkrā) にいれ、頭の上にのせて運び、channa その他の混植作物種子を ghar でとり除く。

小麦と混植される作物には大麦の他に3種類の豆 (channa, maṭṭar, masur: 前述) があり、いずれも食用にする<sup>(54)</sup>。麦との混入率は channa では5:1だが、channa の単収が他の豆に比して多いので単植することも多い。飼料用作物として sarson (アブラナ)・jāī (カラス麦) を単植し、rabi 収穫前の飼料端境期に青刈りして用いた<sup>(55)</sup>。豆類の刈り取りは Jāt 自身または雇入 Chamār が行い、高く根刈りして緑肥効果を狙い、二毛作 kharif 作物の高収穫を期待する。

#### (IV)

近代的統計導入以前からはじまっていた変化をうける前の伝統的農業の作付比率を各種の方法によって推算しうるが、輪作方式の分析結果は、民族誌的方法により復原しうる伝統的作付に近い。Whitcombe (1971: p. 27) は多数の輪作方式を記述しているが、これらの方式を無差別に、つまりどの輪作方式も同じ頻度で行った場合の作付比率が、民族誌的方法により定性的に復原された状態に近いので以下に述べる<sup>(56)</sup>。

この復元方法によれば、rabi と kharif の作付面積比は47:53で kharif がやや多い。しかし kharif の70%強をしめる bajrā・jowār の半分以上を青刈りすることを考慮すると、作付面積に作付日数を乗じた「延べ栽培面積」は rabi にやや有利である<sup>(57)</sup>。Rabi 期間中では全耕地の約4割が休耕、3割強が単植小麦、3割強が gojāī・bejhār, kharif 期間中では全耕地の3割強が休耕、5割強に雑穀、約1割に米、甘蔗は1割以下と概算される。雑穀青刈りを考慮した kharif の延べ休耕率は45%以上で、rabi の休耕率よりやや高い。Jāt の世帯規模5人、常傭 chamār も同5人として、Jāt の家族全員と chamār 家族半数の1年間分の主食を rabi で供給し、かつ rabi 穀物の40%が納税することを考慮すると、上記7.5人分の主食を確保すべき経営の規模は4.5haに達する。つまり、135aの小麦畑(収穫1350kg)、130aの gojāī・bejhar (収穫1040kgうち穀物は半量)があれば、主穀総生産量が1870kg (12.5人分)に達し、このうち40% (750kg) を貢納しても7.5人分 (1125kg) の主穀を確保できる。

この経営規模の kharif 作付は、早生雑穀35a、並生雑穀135a、晩生雑穀(米を含む)が95a、甘蔗が35a、休耕地150aである。これから収穫される米(475kg前後)をすべて貢納用に換金し、それでも不足する分150kgを雑穀で補えば、主穀の40%にあたる租税分を満たす。さらに常傭 Chamār 家族の主穀不足分375kg (全部雑穀とする) を満たせば、残りの雑穀等は青刈りして飼料にできる<sup>(58)</sup>。この試算によれば青刈り率は雑穀作付の5割強に達す

る。実際には手許にのこる rabi 収穫物 (Jat 及び Chamār 用)・kharif 穀物 (chamār 用) は上記推算よりも大きい。小麦・米の価格は大麦・雑穀より高いから、全作付にかけられる租税額を小麦・米のみで支払えば、手許に残る穀物の総量は多くできる。この余剰を村内での現物賃金用の āṭā・雑穀にまわせたろう。

Rabi では小麦が最も重要と考えられた作物で、abadi の周辺、特に前述した gōhan に小麦単植作付をした。換金用の米の作付面積が水供給から限定的だったので、kharif の主体は雑穀だった。雑穀は中下層の重要ではあるが季節的な食糧になるのを除けば、大部分が飼料だった。つまり、伝統的農法の重点は「正当な」食糧たる小麦と小麦耕作を可能にする中下層及び家畜労働力を維持すべき雑穀とにあった。伝統的 rabi はほとんど無除草だったから、粗放な印象をうけるが、除草がほとんどないのは地中海式農業の特徴である。Gōhan に播種し、あるいは sān・dhaichā を小麦畑にすぎこんだのに対し、他作物には非計画的施肥すらほとんどなかった<sup>(59)</sup>から、施肥面でも他に比して小麦を入念に作った。前述のように小麦だけに小規模な灌漑を年1回程度行うことがある一方、他の作物は無灌漑だったことも考慮する必要がある。つまり、近代的農法に比較すれば、一見粗放な印象を受けるが、伝統的農法では小麦が最も集約的な作物だった。

最重要作物である小麦の耕起・播種・灌漑・除草を個々の地主自作農世帯および常傭の Chamār 家族の労働力で行いうるのに対し、個々の経営が不特定の村落居住者を流動的に雇用せざるをえない最大の繁忙期である rabi 収穫は、村落居住者全体が参加する (Etienne, 1968 : p. 52) 点で「共同体的」作業だった。1筆のなかでさえ徐々に収穫をむかえる kharif 穀物は徐々に刈り取ればよいが、前述の状況から放置すれば地表面に落散して収納が困難になる小麦の収穫期には、全域的な労働力不足のなかで刈り取りを急ぐ必要があり、経営側のこの事情から、労賃冷却のための様々な経済外的操作にも係らず、小麦刈り取りの労賃が高騰して、労働者側は食料をこの作業への従事により確保できる結果となる。以上から明らかなように、Jat の伝統的農業経営は、「正当な食糧」である小麦耕作を目的として、小麦の耕起等の作業に必要な家畜群を部分的には kharif 雑穀の青刈りにより維持し、少なからぬ部分を kharif 雑穀によって支持する大量の労働者を必要短期間雇入するが、他の時期には自らの家族・常傭い Chamār 家族のみで耕作する経営形態をとり、村落社会全体がこの経営を可能にする機能を有した。

Kharif 穀物作の伝統的農法には rabi ほどの労働力を要さない。Kharif 作は小麦ほど発芽に酸素を要さず、耕起は簡単で、栽培期間中降雨量が多く灌漑は不要である。青刈りにより収穫期の収穫面積は小さい上に、収穫期が分散するから収穫労働も集中しにくい。ただ数度に除草だけが中期的・中位の労働集中を要する。除草には家畜を用い難いから、kharif だけなら家畜の必要性は小さい。さらに kharif 作物を食用とすれば完熟まで刈り取れず、季節的飼料不足が深刻となり、畜群維持が困難になる。Kharif 主作ならば当然大面積の食用 kharif 穀物の畑の除草に中程度の労働力を長期間投入する必要性が生じ、除草作業に大量の労働力を雇入しつづけるのが不利になるから、経営規模はほぼ家族労働を前提にした範囲に集中しがちである。北インドの支配 caste の農業経営では主目的である小麦耕作の遂行手段としての畜群の維持が不可欠だったから、耕地の少なからぬ部分に粗放な kharif 作、つまり飼料用雑穀栽培をして、季節に関係なく一定量の飼料を畜群に供給する必要があったので、副次的に kharif 作が必要になった、とするのは必ずしも誇張ではない。

Kharif が重要な経営が北インド村落内にあったとすれば、小麦耕作に要する資本、つまり畜群・大型農具をもたない零細耕作者だったろう。Kharif 雑穀を中下層 caste が食糧とし、一時期に集中しない刈り取りには鎌をもちいずに手で引き抜くなどは kharif 主作の耕作者がもしあったのなら、非支配 caste であったことを示唆する。零細耕作者である中下層 caste は、いわゆる caste 職業を含む様々な労働に従いつつ、短期的に貸し出される小耕地で片手間に kharif 作物を作り、自らの kharif 耕作の農閑期中に来る rabi 収穫期に農業労働者として雇用されて初めて充分な現物収入を得たとみるのが合理的である。現在でもみられる典型的小農経営は前述の野菜作りである。雇入労働を用いず、家族労働力のみで経営し、無畜で犁耕せず簡単な農具のみを用い、人力で灌漑するのがその特徴である (Lewis, 1956; p. 281)。都市を除けば野菜消費は低調で、農村部では支配 caste でさえ野菜をほとんど食べなかったから (Etienne, 1968; p. 84)、この種の経営は量的には重要でなかったが、上記諸特徴は支配 caste の経営と対照的である。

### 註

(1) 家畜飼養・農具・灌漑等については次稿であつかう。

(2) 他に arhar (*cayanus indicus*) がこの地方で作付されてきたが、Dhādeki では現在栽培しない。

第一次大戦前後に現栽培品種の高収穫甘蔗が普及し、今世紀の中葉以降では甘蔗が Dhādeki の属する Saharanpūr 県をふくむ Upper Doab の主力商品作物である。Saharanpūr 県に南接する Muzaffarnagar 県を中心とし、伝統的 rabi 経営を犠牲にして近代的甘蔗栽培が拡大した (Bhatia, 1965: p. 1302)。つまり全体として甘蔗栽培・加工法は近代的である。が、中間加工(粗糖生産)に caste 職業に係わる分業が観察される。「共同体的農作業」である rabi 収穫の伝統的労働集中に caste の分業がみられないのに、近代的商品作物の半加工に caste 分業が存在するのは一見矛盾する現象である。

甘蔗畑は乾期に10回以上耕起する (Etienne, 1968: p. 73)。うえつけ用の甘蔗畑から茎をとり、これからうえつける畑の上で鎌を用いて約30cmの長さに切り、畑の保有者である Jāt がひく二頭の去勢雄牛のひく犁でほった溝に被差別 caste の子供達が手にもった茎をうえる。甘蔗畑には栽培期間(一年半)を通じ6回灌漑する。うねの間に水をひき、根元が冠水しない点が小麦灌漑と異なる。小麦と異なり甘蔗畑には灌漑が不可欠だから、この地方での甘蔗作付の拡大の前提には英領期の Upper Gangā 運河建設があることを理解できる。商品性が高いので甘蔗連作が少なくなく、施肥が必要である。元肥には4ヶ月程の牛舎堆肥 (khād(H)) を10aあたり約400kg施す。切り麦ワラ・甘蔗搾槽をしいた牛舎に冬期牛・水牛を飼ってつくる堆肥作りと施肥が普及したのも当然甘蔗作付拡大以降で、Jāt には堆肥づくり・施肥を忌避する傾向はなく、他の特別な慣行もなく、堆肥を化学肥料と同様に扱う。うえつけ時および2～3回の追肥に尿素を用いる。追肥が2回ならば、うえつけ後20日目と50日目に10aあたり2kg (1975にはRs 6相当) を1日Rs 5の賃金で労働者を雇って施肥した。播種とは異なり、皿に入れた尿素肥料を手ですくってまく。3～5回除草し、小型除草具は労働者が持参し、大型除草具 (paulā) は Jāt が貸す(除草具は次稿で言及する)。甘蔗の葉を何本か手にもち、左手に一端を固定し、右手で回しながら他端からよった一種のひもの junni で収穫が近づいた甘蔗株がひろがるのを防ぐ。

Junni は11—12月に刈り取った甘蔗茎をたばねるのに用いる。柔茎品種の導入で労働量は半減したが、10aの刈り取り作業自体に3時間強を要する。刈り取り作業を急ぐ必要がなく、甘蔗畑が家から遠いことが多いので、運搬・食事の際の往復などに時間をとり、10aの畑の収穫作業全体に1



日近くかける。刈り取る畑で加工用茎・飼料用先端部・燃料用枯葉を選別し、加工用茎をたばねて牛車にのせる。刈り取り労働者は村内から雇う。父親が刈り取り、母親が束ねて運び、子供が運ぶのを助ける *chamār* の家族労働が一般的である。通常の賃金の他に委託飼養の水牛（次稿参照）の飼料用甘蔗先端部を1日に5〜6束もらう。刈り取り後は害虫・雑草駆除のために、*Jāt* も加わって火入れする。甘蔗は4月にうえつけ翌年11〜12月に収穫するので、そのあと (i) 直ちに *rabi* を播く、(ii) *kharif* まで休耕する、(iii) そのままにして *pēri* (甘蔗の楚 < *pēr* (H)) を収穫する、の三利用法がある。(i) は労働力供給が困難で、(iii) は収穫量が6割程度におちる (Etienne, 1968 : p. 73) ので、(ii) が多い。

刈り取った甘蔗茎 (*gannā*) を *charkhi* ((P) 車) に運ぶ。狭義の *charkhi* は甘蔗の搾汁装置をさすが、広義には搾汁を煮つめるカマ・加熱装置、およびこれらの北西側につくる小屋がけをふくむ粗糖生産の加工施設全体をさす。Threshing pan の中心に *charkhi* をおく。垂直方向に軸をもつ二つの鉄製ドラムが *charkhi* の主体で、ドラムの間に甘蔗茎をおしこんで搾汁する。Threshing pan 上の役畜の回転歩行を役畜のくびにつけた柄 *lānyān* を通じて *charkhi* に伝達し、搾った汁 (*ras*) を threshing pan の下の蓋つき溝に流し、並列する三つのカマ (*kuḍerō*) のいづれかに注ぎ、ゆっくり加熱したあとカマに近いやや温度の高い四つ目のカマに流して少し煮つめ、さらにカマにちかい五つ目の煮つめガマ (*kaṛhāi*) にひしゃく (*dhoṛā*) でくみ上げて煮つめ *rāb* にする。*Rāb* をカマにもっとも近い高温の平板 *chākh* の上にしいた粗布 (*bori* または *tāt*) の上で大きなへら (*chatwā*) でひろげる。水分を失ってほぼ固形化した *rāb* を布ごと床面からおろして、冷すとかたまって *gur* になるが、布の上で固まった板状の *gur* を特に *minjhā* とよぶ。半地下式（比高150cm）のカマ (*jakōr*) では甘蔗搾片 (*bagas* (E)) を燃やす。もさない搾片は山 (*khai*) にして保存し堆肥に用いる。熱風と煙は *chākh* と *kaṛhāi* の下をとおり、ややひえながら *kuḍerō* の下をとおって、その先の煙突 *dōḍrī* から出る。冬の雨が入るのを防ぐのに、*chākh*・かま・かまどの風上側に小屋がけをつける。

*Chākh* からおろした *gur* を布の上でまるめて *chakū* にして、麻袋につめて牛車で運び、近隣小都市の市場で売却する。自給用には *gur* を用いる。甘蔗栽培が小規模だった時代には *khānd* を *gur* からつくった。*Rāb* を一週間程放置し自然結晶させ、*ghee* をつくるのに使う *rāi* に似た遠心分離器で処理し、固形分を天火乾燥させ、できた粉状原糖を再度水にとかし、浮遊物を除いてから煮つめ、ソーダで漂白し、天日乾燥して板状の *rabi* をつくった。*Rabi* をスリゴギでたたいた粉状の砂糖が *khānd* である。*Khānd* をつくるのは今日では稀だが、祭礼に米飯に *ghī*・*khānd* を加えて食べることがある。

*Charkhi* 自体は近代的需要を満たす近代的設備である。発動機で *charkhi* をまわすには発動機を町から借りるが、畜力 *charkhi* は親族組織と重複するまたはしない (Pradhan, 1966 : p. 15) 4世帯が組み合って所有する。各 *Jāt* 世帯は雇人・役畜を用意し、4つの *kuḍerō* に *ras* を一杯にすると交代する。一交代には約一時間を要し、約30kgの *gur* をつくる。24時間稼働すれば6〜7tの甘蔗を搾って600〜700kgの *gur* をつくる。発動機を用いれば2倍の効率なので、市場の変動にあわせて、24時間稼働しより大きな利益を上げうる。

Dhādeki の16の *charkhi* のうち、14を *Jāt* が組みあって所有する。この数は甘蔗生産が拡大して以来変わらない。自分の畑の甘蔗を自分の組み合う *charkhi* で、自分の役畜と自分の雇った労働者と自分自身と自分の家族で加工するのが原則だが、刈り取る畑が小さく自分の *charkhi* から離れていれば、他に頼むことがあり、甘蔗をもちこんだ *Jāt* に対し *charkhi* の所有者が売却相当額を払う慣行がある。先払い・後払い・現物 (*gur*) 払いのうち後払いが最も多い。相場が絶え

ず変動し相当額が不明だからである。刈り取った gannā を無加工で村外に売却するには、各村落代表委員が構成する pargana 単位の gannā samāj (*ibid*, p. 38) に手数料を払う必要があって不利なので、ほとんど全部の gannā を村内で加工する。20C 第 1 四半期に甘蔗作付が増加した背景には砂糖価格の急騰(佐々木, 1984 : p. 21)の他に、柔茎種の導入と charkhī の鉄製化があった。19C には硬茎種の gannā を木製ドラムの charkhī で搾汁したので、あらかじめ gannā を細断しても圧搾力が弱く、途中で周囲にとびちり、charkhī の効率が悪かったのを克服できたからである。

甘蔗作付の拡大と現在みられる charkhī の建築が近代的なのに、奇妙なことに charkhī での労働組織は部分的に caste 分業と対応する。畜力 charkhī では 6 人以上が働く。Gannā を charkhī におしこむ charkhiwālā (2 名) は経営者 Jāt である。ただし発動機 charkhī では Jāt 以外でも構わない。役畜追い (1 名) には caste 選好がない。搾汁の濃縮・粗糖の成形を分担する被雇用者 (pakwā または karighār : 2 名) は Jāt または Jinwar, Telī, Döm 等の可触中間 caste でもよいが、Halowāī (砂糖菓子作り) が最適とされる。カマドを分担する者 (jokkā) は chamār のみで、通常一世帯が交代である。雇用者の賃金は 5% の出来高払いだから、昼夜働けば約 30kg の gur を入手できる。Dhādekī の charkhī での支払いは Pradhan (1966 : p. 51) の言及する jajmāni 支払い (caste 別定期定量現物支払い) ではない。Pradhan は “jajmāni 支払い” の細部に言及しないが、Dhādekī の事例から類推するかぎり、作業分担に caste 分業が曖昧に対応することと、かつて “jajmāni 支払い” の現実の場だった小麦収穫と同率の 20 分の 1 の現物支払いであること、の二点から “jajmāni 支払い” とした可能性が高い。Charkhī の上で働く人々には差別がなく、中間 caste の被雇用者がさし出す搾汁を朝食がわりに Jāt が飲むのが普通にみられる。Chamār のみは差別され、半地下式のカマドの周辺で作業するか、threshing pan の上で子供が牛追いをするだけで、小屋がけ部分には入らない。ただし、多くは Jāt である charkhiwālā が牛追いの chamār の子供と同一平面上で仕事をするのに全く抵抗はない。発動機 charkhī では処理速度が早いので 4 名程度の kullī (「苦力」) を雇い、gannā-bagas を運ばせる必要があり、さらに発動機管理の naukri が一名いる。これらの作業には caste 選好がない。

Jāt が charkhī 全体を chamār に委託してある 2 つの charkhī ではすべての作業を chamār が行うから、caste 職業と作業との対応はさらに不明瞭である。前記した charkhī での caste 職業との対応関係の曖昧さ、および 19C 以前では甘蔗の作付が少なく gannā のまま小都市に集荷して都市で粗糖に加工したとみられること、の二点を考慮すると、現在の農村 charkhī の caste 分業的外観は、近世の都市 charkhī のより厳密な caste 的雇用労働組織の不明瞭なコピーではないかと想像される。現在の charkhī の半 caste 分業組織の経済的機能は明らかである。Rabi 収穫ほど急激ではないが、長期間労働力の不足する甘蔗収穫・加工期間中、主要労働力源である chamār のみを雇用すれば、賃金が高騰しかねないから、農業労働以外の caste 職業につくべきことになっている中間 caste をその caste 職業に関連した作業に参加させれば賃金を冷却できる。高騰した賃金がすべて chamār に流入すれば、この caste の発言力が増大し、この caste の安価な労働を前提とする支配 caste の経営はやや困難になろう。そこで利用するのが中間 caste の労働力である。中間 caste には caste の職業が一応あるが実際にはその職業への就業率が一般に低いので、それとはわからない村落内労働力プールを形成しているから、繁忙期に chamār に求めたくない雇用を適当な理由——caste 職業に似ている——をつけてひき出す。村内に若干数の chamār のみの charkhī があれば、雇用している中間 caste 労働者が労働条件に不服を述べた時に、支配 caste は「全部 chamār にしてもよいのだ」と返答できる。これに対して、中間 caste 労働者が作業の特定部分が自分の caste 職業と関連するからと主張して雇用を確保するのはその作業への低賃金雇用を承諾することに他ならないから、現状の半 caste 分業的労働組織が支配 caste の

経営にとって極めて有利であることには疑いがない。

- (3) 乳幼児を加えれば9人強 (Nath, U., 1965 : p. 714) になることもある。
- (4) 平均することには意味を認めたいが、延べ人日で計算すれば年間一日平均2人強を雇入する程度だろう。
- (5) 畜群構成を次稿で述べる。2頭の他に乳用雌水牛、「予備」の去勢雄牛、雌牛・幼獣等を加えた6頭前後が平均である。
- (6) 畜群維持と関連するので次稿で述べる予定である。
- (7) 富裕な Jāt が小規模耕作者に役畜等を貸し出す (Hale, 1975 : p. 41) 際に、下限よりも多少小規模な Jāt の経営を優先させる。
- (8) この用語が一種の婉曲用法なのか、または近世中ですら無視できぬ地表面が森林・荒地だったとみられることを反映するのかわかり不明である。北インドでは Mughal 時代後期から近代に森林・荒地等が急速に耕地化し、現在では村落成立の時代差にかかわらず耕地率が8割以上に達する (Hasan, 1969 : p. 187)。
- (9) 19C中頃までのように新しい耕地が多少とも入手できれば局部条件の同一な小耕地の細分割を抑制しようが、耕地の拡大が限界に達した近代には、ある混植パターンに適するとみなされたもともと広くない khēt が急速に細分化された (Opler, 1959 : p. 130)。
- (10) 堆肥多用 (Nath, U., 1965 : 716) の一見現代的にはみえない農法も含め、多収穫品種導入等の各種の近代的農法が普及し、伝統的農法を放棄して、条件の微妙に異なる khēt の分散所有のもつ最低収穫量確保の意味が縮小したのが交換分合の実施背景である。Rabi に混植パターンが多く、混植パターンの放棄が rabi の相対的縮小と並行するのに加えて、近代的技術は小麦以外の rabi 作物に適用されにくいから、伝統的農法の放棄と近代技術の導入は kharif への傾斜 (Etienne, 1968 : p. 72) と並行的でもある。
- (11) 現在では緑肥・堆肥・化学肥料の三種をほぼ等量用いる。主要商品作物の甘蔗・小麦・米では緑・堆肥を10aあたり、各15, 10, 8kg施肥する。Jowārには施肥が望ましいが、一般に kharif 雑穀は無施肥である。雨天で牛糞を乾して燃料にできない雨期に、ghēr 近くの空地にためた牛糞に麦ワラその他を混入して、露天で熟成させて堆肥をつくるのは、甘蔗栽培の近代的拡大以降の慣行である。牛糞の大部分を燃料化するので、堆肥が不足しがちである。不足時には、耕地をもたないが牛・水牛を飼う非支配 caste の世帯から 100kg/Ra で購入する。化学肥料の主力は尿素肥料である。尿素肥料には堆肥に比して割が高感があるが、60年代末迄に政府が組合を通じて配給し普及をはかったから、小都市市場でも自由に入手できる (Dobbs & Foster, 1974 : p. 115) ので、尿素肥料を主として甘蔗に多用する。
- (12) 近世都市近郊の野菜作り等では連作・施肥が必要だったから、この地方で連作による土地生産性の低下が問題になったのは英領期の運河建設後に非主穀商品作物(甘蔗)の作付が拡大して以降とする (Whitcombe, 1971 : p. 8) のは、不正確である。
- (13) 化学肥料の選択的利用が肥料自体の「清浄性」に起因するのは確かだが、この選択はインドに限られないから、化学肥料の利用をインド固有の「Hindū 教」と関連させるのは合理的でない。
- (14) Jāt は野菜をつくらない。野菜をつくる者は村外から種を購入する。
- (15) 英国 Rallis, 西独 Bayer の諸種の農薬を、小麦・米および特に甘蔗に少量用いる。
- (16) 現在では約半数の Jāt 世帯は農繁期に農業労働者を短期雇用するのみで、他の半数が半年分賃金前払いで長期雇いの農業労働者をも雇う。この状態は zamindāri abolition 前後からの経営規模の縮小と農法の変化とにより、比較的小さい経営が可能になり、小規模経営数自体が増加して、繁忙期を除けば、家族労働のみで充足できる傾向が強まっている結果だろう。長短期とも被雇用者は原則として村内の農業労働者(主として Chamār)だが、実際には村外の若干の Chamār も雇

う。ただし、調査当時に40~50名の Chamār・Bhangī 青年が労働条件のよい周辺小都市の建設現場にいたのは、村内 Chamār 労働人口に多少の余裕があったことを示す。教育が普及し、被差別農業労働者として村に住むのに反発しはじめ、都市的雇用を求める傾向が生じ、村内の農業労働力が不足する、と Jāt は主張する。しかし、この理由づけは疑わしい。繁忙期を除けば、村内の経営体が村内の全労働者を雇入できるとは思えない。農閑期には無理に雇入しても仕事がなく、経営者が払える賃金も名目的にならざるをえないから、村外雇用がもしあれば Chamār 等がそれを逃さないのは当然で、近代教育との関連を認めがたい。

村外の農業労働者を雇うのは、村内の農業労働力不足からではなく、村内の労働者に対し経営者側が必ずしも村内労働力に頼らなくてもよいことを誘示し、結果的に村内で雇入する労働者の賃金 cut を実現することが目的であると考えられる。被差別農業労働者 caste の Chamār が村落間を移動する傾向は近代以前からあったと考えられるが、経営者側の賃金抑制を狙った村外からの「ひきぬき」はこの移動の重要な契機だったろう。Zamindārī abolition による Chamār の世襲的雇用の喪失と経営規模のゆるやかな縮小に加えて、近年ではトラクター等の農業機械の導入により、特定期の特定作業を除けば雇入労働力の必要性は低下しつつあって村内労働力はむしろ過剰気味で、Dhādeki でも過剰になった Chamār 世帯が独立後相当数離村したほどだから、村外から雇入するのには強い動機があると考えべきである。

現在の常傭の契約は1年または半年で、通常6~7月に更新し、賃金は短期に比し5%ほど少なかった。日・週傭の賃金は夕方・週末に支払うが、常傭は前払いする。

- (17) Zamindār-raiyā 関係と現行の短期雇用は共存しうるのであって、二つが同時的に存在したとする必要はない。他方、zamindār-raiyā 関係はいわゆる jajmānī 支払いとも共存しうる。この部分で Jajmānī について言及しないのは、Dhādeki ではこの支払い方法に関する記憶が全くないからである。ただし、Dhādeki の歴史上 jajmānī が一度も存在しなかったと主張するのではない。Dhādeki でもかつては存在したのかもしれない（しなかったのかもしれない）が、かなり早い時点から、現行の出来高払いに移行したと考える。Jajmānī 支払いには、収穫物を一ヶ所に集中する必要があるが、Dhādeki ではかなり早い時点から Jāt の農業経営体数=世帯数が相当数に達し、多数の経営体の収穫を一ヶ所にあつめて、多数の中間 caste に割り当て分を分配したあと、再び残りの少なくとも一部を多数の経営体に分配し直す手順をとらざるをえなかっただろうから、Jāt の世帯数が極く少なかった早い時点の一時期を除けば、jajmānī 支払いは困難だったとみられるからである。

- (18) この他に耕地の地ならし、甘蔗畑の除草などがあるが、収穫作業が特に重要である。短期雇用の集中する収穫期には労働力が不足するので、労働者を確保する必要があり、地主自作農間で労働者をとりあう。労働者争奪の間接的表現が“faction”である。行政金融機関との接触が多く、低利資金を得やすい(Pradhan, 1966: p. 17) faction 中心地主自作農の資金の投入目的は生産性を向上させるべき近代的農法導入に限定されがちだが、村落内の農業労働者の雇用条件にも資金導入の好影響がある。賃金そのものでなくても付帯的雇用条件に多少の差があれば、特に労働力が不足して被雇用者側の交渉能力が大きい収穫期には、条件の良い地主自作農に労働者が集中するから、条件的誘引力をもたない一般の地主自作農は中心的地主自作農では余りがちな労働者を廻してもらい必要がある。中心的地主自作農に雇用されなかった労働者は、その faction に属する一般の地主自作農に廻してもらえば、そのうちに中心的地主自作農に好条件で雇用されるだろうと考える。どの faction の中心的地主自作農が最も有利な条件で雇用する最も有力な世帯であるかを中立的観点から(Hale, 1975: p. 53)判断するのは農業労働者の重要な能力でもある。優勢 faction が労働力を集中するもう一つの機構が、道路・水路改善等への非支配 caste の“volunteer labour”(ibid: p. 42)の徴集である。“Volunteer labour”は一見共同体的理念に基づくかの錯覚を与えるが、

優勢 faction (特に中心的地主自作農) の利益を目的に中下層の遊休労働力を組織的に徴発する近代的紛飾をもつ強制労働 (begār) である。

- (19) 小麦は束数で5%を払う。茎が短かく束にできない豆は小さな山に積みあげて、その数で5%を支払う。
- (20) 播種前が極乾燥期にあたる kharif では、前年末の sanī (麻 *crotolaria juncea*)・lōbiā (ささげ *vigna sinensis*) の刈り敷き以降、緑肥を求めがたく、混植の旱生豆類収穫後その枯れた栄養体を利用するので重要な施肥法だった。
- (21) 全面積の 1/3 は小麦であり、残りにジャガイモ・ナス・トウガラシ・タマネギをつくる。
- (22) 貸し出し期間は4～5年、借地料は年間8Rsだった。学校へ行かない少年を含めた Jinwar 男性が盗難防止のため畑のなかの小屋に寝泊りして耕作する。小屋の周りには水牛の飼葉桶・手押ポンプ・灌漑用ポンプを配置する。
- (23) 近代の人口増大以前には、人口密度が低く、世帯規模が一般に小さかったから、分割のすすまな比較的大きい経営規模に比し、必要な Jāt の家族労働力が不足しがちだったろう。この状況下では中下層 caste に小作させる余裕が大きかったと考えるべきである。
- (24) 果樹園は、収穫期近くになって所有者家族男性がとまりこみで見張りする程度で、人手がかからない。
- (25) 現在移植栽培する主要品種は「緑の革命」で導入した短茎高収穫晩生種である。
- (26) 降雨量に応じて補助的灌漑を数回くりかえす。地下水灌漑の水田もあるが、主として運河を利用する。Dhādeki の稲作は近代的水利に依存し、稲の作付は英領期建設の運河に近くに多い。
- (27) この作業には村内の chamār を雇用し、1日に0.5～0.6haの整地に対し、1975には1日5Rsと食事を支払った。
- (28) 現在では苗代をつくり、田植えをする。低温による発芽障害等がないから、移植すべき耕地の隅に簡単な苗代をつくるので、苗を運ぶ必要はなく、田植労働は苗を抜き隣にうえる作業だけである。田植えには自村・他村をかぎらず、適当な被差別 caste を雇入する。他村の労働者の賃金は自村の労働者の賃金に比してやや高いのが普通だが、前者の労働時間がやや長いので、作業量あたりの賃金はほとんど変わらない。田植えが近代的で労働慣行がないので自村の労働力を用いるとの原則がないことと、自村労働力のみに頼ると高賃金になるが運河を利用できない近くの村から安い労働力を雇入できることが、他村の被差別 caste を雇入する最大の原因である。Chamār の女性を2人一組で雇い、25aの稲田を6～8時間かけて田植して1975には8～10Rs払った。田植えのすんだ田は整地も不完全で畔のつくりも粗く、苗の密度も直播と大きく変らない。移植農法の収穫量は、田植労働力の投入分だけの増収をみていないとの印象を与える。
- (29) 稲の栽培の各段階に好適な気候が長期間つづくので、水がかりが悪くて発育が遅れた稲でも開花・受粉して結実できるのが、収穫期のずれを生む農業気象的条件である。
- (30) Munji の収穫期の10月には雨の日1日あたりの降雨量が極小になるので屋外に干すのに好適である。
- (31) 乾期中に早目に播いて飼料不足を補うには多少灌漑する必要がある。
- (32) 耕地利用率が高い現代は rabi の後に bajrā・jowār を作付することが多い。
- (33) Makki を urd と混植することはない。早播・宵刈りして飼料とし、kharif 播種期中に全部刈り取ってしまい、他の晩生作物、特に商品価値の高い水稻を作付することが Jāt では多い。
- (34) かつては bajrā・urd が kharif の最重要飼料作物だったが、現在では甘蔗の葉を通年利用できるもので、雑穀・豆の依存度・作付が縮小した。
- (35) この季節には常傭の chamār が dhaichā の種を棒でたたきとる光景をよくみる。
- (36) Dhādeki の属する Saharanpūr 県にはタバコが主要な商品作物である地域もあるが、Dhādeki

では、作付期間が甘蔗の5～6分の1で利益が大きい、栽培技術が複雑で政府の干渉が複雑なので、全くつからない。

- (37) 現在では三人一組で一人が化学肥料をまく。
- (38) 高収穫の mexican 種を導入して、小麦単植耕作が拡大してから rabi 灌漑が本格化した。小麦の灌漑期には運河の水位が低下して取水できないので、地下水灌漑が一般的である。富農はこの時期に tractor を灌漑動力として貸し出す。動力に余裕のある富農では、ナタネ・カラス麦・クローバーの畑を灌漑することもある
- (39) ただし単植小麦畑では必要に応じ一回除草することもあった。
- (40) 季節的に飼料が少ないので麦ワラを低く根刈りして重用する。
- (41) Brahmin が参加しないの安定した耕作権を与えられることがあるので、雇用対象外とされるためだろう。あるいは Bhangī と同様の宗教的理由があるのかもしれない。Bhangī を雇用しないのは、この caste が伝統的加療者で、他の農作業に全く雇用されないことからみて、呪術的理由——耕地に踏み入れることが作物に有害である——があると考えられる。ただし Bhangī は乞食をしまわり、一つの畑で1束を与えられ、一日一人あたり2～5kgの ātā を得る。
- (42) この期間には離村している chamār も休暇をとって帰村し手伝う。
- (43) Rabi 収穫だけで一年間の生活がほぼ可能なのだから、悪い条件で雇用されつづけるよりは、良い条件で rabi 収穫労働のみに従う方が有利な場合が起こりうる。
- (44) 全域的に労働力が不足するので、小さい pūli を選んで労働者に支払うと信じられている信用のない地主自作農には労働者が集まらないので、小都市の貧窮 Muslim を村の労働者を集めるのと同方法で雇入る。村の労働者 (Chamār) の女性は男性同様に働くが、Muslimの女性は pardah を守ろうとして仕事を怠りがちなので劣悪であると考えている。
- (45) Jātが Chamār の居住区に入って人集めすることには全く抵抗がない。
- (46) 一筆内でも生じる収穫時点の大きなずれと背刈りにより、kharif の収穫が小規模かつ長期間にわたり、収穫期の繁忙ピークが生じにくいと対照的である。
- (47) 一集団の多くは3世帯以下で、労働者人口は6・7人程度である。
- (48) 女性は水牛に飼葉を与えて日かげにつないで昼食をつくってもってくるから1～2時間遅れて参加する。
- (49) 極繁忙期の月齢が作業時間を規定することが太陽太陰暦の利用と関連することを想定せしめる。
- (50) Khalyān と地主自作農世帯またはその親族集団・faction などとの特定の関係はない。
- (51) 水牛の蹄は小さいので適さないから牛のみを用いる。
- (52) 稲の場合のように畑においても盗難の恐れが少ない。全域的に小麦収穫作業に従いうるので、窃盗をする者が少ないからである。
- (53) Tractor 所有者は風選機を動力につなげ、1時間に100kgの小麦を処理する。村人のなかには隣村の電動風選機まで行く者もある。町ではこの季節になると街頭に貸し出し用風選機がならぶ。
- (54) 甘蔗栽培で低下した地力の回復を目的として単植することがある (Etienne, 1968 : p. 72)。
- (55) 現在最も重要な rabi 期間中の飼料作物は barsim (クローバー) である。この地方に barsim をもたらしたのは印パ分離時に移住してきた Punjabi である (Nath, U. 1955 : p. 777)。3—6月には barsim をワラクズ・甘蔗切片とまぜて用いる。barsim のように小さく束ねることの作物は刈り取るのはじから薄い木綿の風呂敷 (rūmār) につつんで運ぶ。
- (56) この方法が他に考えられる推算方法に比して著しく科学的であるとの保証は何もないが、19C中の想像される農業変化の複雑から考えて、20C中の判明している変化を適及させる extrapolation がこの方法と少なくとも同程度に非科学的であることを指摘すべきである。この方法により復原される作付比率は現在のそれと二点だけで大きく異なる。食・飼料端境期に収穫できる早生雑穀のト

ウモロコシが kharif の 1/3 を占め、通年作甘蔗の作付が rabi・kharif と並ぶ (Etienne, 1968 : p.73) のを除けば, radi・kharif 作付面積の接近, rabi を小麦と大麦・豆が二分する作付等はいわらない。この他には地主自作農 caste の人口蓄積により保有規模が縮小し、休耕地比率が顕著に減少している。

- (57) 北インドの非 Jāt・非 Rājput 村落の農業が kharif 雑穀に重点をおき (Rao, M.S.A., 1962 : p.1545), Jāt 分布地域に東接する Oudh が kharif 特に米作を主とする人口稠密地帯であり (Sharma, S.P., 1973 : p.83), 南接する Madhya Pradesh 北西部が rabi 単作に近く (Gupta, L.C., 1966 : p.27), 西接する Rajasthan が kharif 雑穀地帯である (Singh, J., 1974—75 : p.39) ので, Jāt-Rājput 等の北インド農村の支配 caste の農業の作付上の特徴を rabi 優越の二毛作とみることができる。
- (58) 総作付は次稿に述べる家畜群維持量に達しているが, kharif 期間中の飼料の一時的不足を補うのにこの程度の青刈りが必要である。
- (59) 小面積の滞水地につくった米・甘蔗は, 乾期に滞水地で排便する習慣があるので, 結果的に排泄物施肥をみた。

#### Bibliography

- Bhatia, Shyam S. 1965 "Changes in Cropping Pattern —A Study of Uttar Pradesh —" *Economic Weekly* 17 pp.1301-1311.
- Dobbs, Thomas and Philips Foster 1974 "Incentives to Invest in New Agricultural Inputs in North India" *Economic Development and Cultural Change* 21 pp. 101-107.
- Etienne, Gilbert 1968 *Studies in Indian Agriculture : the Art of the Possible* (tr. by M. Mothersole) University of California Press
- Gupta, L.C. 1966 "Changing Pattern of Rural Leadership : A Case Study" *Sociological Bulletin* 15(2) pp. 27-35
- Hale, S.M. 1975 "Development and Underemployment at Village Level" *Eastern Anthropologist* 28(1) pp.23-58
- Hasan, Amir 1969 "The Occupational Pattern in a Terai Village" *Eastern Anthropologist* 21 pp.187-206
- Lewis, Oscar 1956 "Aspects of Land Tenure and Economics in a North Indian Village" *Economic Development and Cultural Change* 4 pp.279-302
- Nath, V. 1965 "The New Village II" *Economic Weekly* 17 pp.713-722
- Opler, Morris E. 1959 "The Chronological Change and Social Organization in a Village of North India" *Anthropological Quarterly* 32 pp.127-133
- Pradhan, M.C. 1966 *Political System of Jat in Northern India* Oxford University Press (Bombay)
- Rao, M.S.A. 1962 "Economic Change and 'Rationality' in a Fringe Village" *Economic Weekly* 14 pp.1545-1549
- 佐々木 明 1983 「Dhādekī-Sālhāpur の家庭生活と周辺小都市——北インド農村の社会と生活(Ⅲ)」『信州大学人文学部 人文科学論集』17 pp.79-91
- 佐々木 明 1984 「Dhādekī-Sālhāpur の物質文化——北インド農村の社会と生活(Ⅳ)」『信州大学人文学部 人文科学論集』18 pp.15-30
- Sharma, S.P. 1973 "Marriage and Kinship among the Jats and the Thākurs of North

- India : Some Comparison" *Contributions to Indian Sociology* 7 pp.81-103
- Singh, Jasbir 1974-1975 *An Agricultural Atlas of India ; a Geographical Analysis* Kuru-kshetra, Vishal Pub.,
- Whitcombe, Elizabeth 1971 *Agrarian Conditions in Northern India* Tomson Press, New Delhi

### Agriculture in Dhādeki-Sālhāpūr (1)

— A North Indian Village (V) —

Akira Sasaki

The purpose of this paper is to reconstruct the ethnography of traditional agriculture in a north Indian village as one of the preliminary steps towards an analysis of the social structure. The unit of the agricultural management is the family of Jāṭ (dominant caste). The system does not fit neatly into the strict peasant category, since each Jāṭ family employs a Chamār (a scheduled agricultural labourer caste member) as the long-term or hereditary labourer whose family subsistence is barely paid by the Jāṭ. Village population is divided into the employing dominant caste and the employed non-dominant castes. The division is perpetuated by the area-limitation (less than 2 ha.) of the non-dominant castes' ill-equipped family *khariḥ* horticulture, far below the lowest margin of the cattled *rabi* agriculture (more than 3 ha.) of the dominant caste.

Fertilizing methods are the customary green-manuring and institutionalized human excrements utilization. Long-term fixed-pay employment is complemented with short-term piecework contracts which are observed predominantly during the harvest seasons. Patterned cereal-legumen mixed sowing is practised to ensure the yields and to fertilize the soil. Vegetable gardens, orchards and *dofassil* cultivation are negligible in comparison with the *khariḥ* and *rabi* cereal agriculture.

*Khariḥ* harvest takes place over an uncharacteristically long period. *Bajrā* and *gowār* are sown extensively mixed with *urd*. A larger area of the millets is cut out at an immature stage for cattle fodder. Paddy is cultivated without transplantation in tiny damp fields irregularly submerged. When harvested, *khariḥ* is threshed by hand throwing.

*Rabi* fields are of wheat or wheat mixed with either barley or peas. Preparatory ploughing is the lower of the two *rabi* labour peaks. The higher and the more characteristic peak is the *rabi* harvest through which non-dominant castes families obtain at least more than half of their annual subsistence. Because of the serious labour shortage, respective Jāṭ are obliged to recruit the *rabi* harvest worker team every evening for the next day according the area to be harvested. The labourers are employed from almost all the non-dominant castes. Cattle tread threshing and



wind selection are carried out at *khaliyān* around the settlement.

The cropped area estimate below based on the hypothetical random operation of the traditional crop rotation patterns agrees well with qualitative ethnographic information. Modal management area per Jāt family is 4.5 ha., of which a little more than half is given over to *khariḥ*. Fallow area occupies nearly 40% during both *khariḥ* and *rabi*. Major crops are wheat (*rabi*) and *bajrā-jowār* (*khariḥ*). Considered as the "proper" cereal, wheat is cultivated relatively intensively. Millets are secondary crops to maintain the wheat ploughing cattle set, partly consumed as the seasonal meal of the wheat harvest labourers. Non-dominant castes operate the small scale *khariḥ* horticulture, when opportunity is offered to supply their subsistence gap.